横浜市立太尾小学校

学校だより

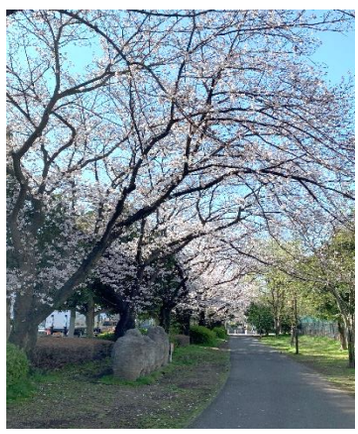
令和３年度４月号

令和３年４月７日発行

＜　豊かに学び　ともに未来をひらく　太尾の子　＞

原点回帰

校長　　館　雅之



令和３年度が始まりました。本日、新入生135名を迎え、児童数741名でのスタートとなりました。ご入学、ご進級おめでとうございます。

今年のさくらは、平年よりかなり早い所が多く、桜前線がハイペースで北上してきました。太尾堤緑道のさくらも桜吹雪から葉桜へと移り変わっています。入学式にさくらという概念も変わりつつあるのでしょうか。変化の激しい時代と言われますが、自然の営みも急速に変化しているように感じます。

学校の取組や生活も今までの営みが急速に変化していくことが予想できます。このような時だからこそ、私は今まで以上に目の前の子ども一人ひとりをユニークな存在としてとらえ、「違うことから始める」ことを大切に学校づくりを進めていこうと考えています。

今年度も引き続き本校の校長を務めさせていただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

昨年度末の卒業証書授与式は「新しい学校の生活様式」で初めて行う式になりました。来賓の参加を控えさせていただき、保護者も１名の入場、今まで行っていた「よびかけ」などはせず、縮小した形での実施になりました。

卒業生の態度や姿勢は立派で、太尾小でしっかり育っているなあということを感じました。卒業生のこれからの活躍が楽しみです。

また、昨年度末に太尾小学区防災まちづくり連携が「防災まちづくり大賞」総務大臣賞をいただきました。長年の学校、地域、家庭との連携を評価いただいたことは大変喜ばしいことです。

一方、これらの学校行事や今までの様々な取組も急速な変化の流れの中で進めていくことになると考えられます。

これらのことを踏まえ、今年度の基軸にしたい言葉があります。「原点回帰」「決める」です。

「原点回帰」とは、物事を始めた時に帰るという意味です。類義語に「初心にかえる」がありますが、原点回帰は単に元に戻る、スタート時に戻り、ゼロから始めるということではないと言えましょう。「原点」は物事を考えるときの出発点や基準になるポイント、「回帰」はひとまわりして元のところに戻るということです。様々な経験をしたり、体験を通して得た知識、さらに今までの知識を更新することを経て原点に戻ると考えると、最初のスタートとは違う立ち位置になります。

さて、「アフターコロナ」という表現がありますが、これもコロナ後に今までのコロナ前に戻るということではないのでしょう。例えば学校では、経験や知識の更新を経て、コロナ前に行っていた学校行事や日々の授業もその時の姿そのままに行うのではではないということです。

「決める」とは、自己決定していくことです。私個人の感覚ではありますが、近年、決める機会が減っているように思うのです。決まっていることを選ぶことは増えたのでしょうが、そのそも決める過程の経験が不足しているのではないかと感じています。決めるには、自分で情報を集め、吟味し、再構成しなくてはいけません。そのためには、知識を習得する必要がありますし、他者の違う考え方も受容しなくてはいけません。その上で、自分で決めることは責任を伴います。

このように考えますと「決める」ことをすごく躊躇しますが、「決め直す」ことも伴っていることが大事です。決めたことをやり通すことは重要ですが、その中にも必ず決め直すことは行っていると考えてはどうでしょうか。

昨年度は入学説明会を動画配信で行いました。決められた日時に学校に来て一斉に話を聞くのではなく、自分で決めた時に視聴できます。何度も見られますし、実際にお子さんと見ながら準備を進めましたという声もありました。

結果として、今まで慣例で行っていた集合型の説明会を方法論ではなく、意義から問い直すことにつながりました。それは「原点回帰」にもつながることととらえています。

このような考えのもと、今年度の学校づくりを進めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

今年度も保護者、地域の皆様のご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

FMD前のホールの飾りより